

【日本側コーディネーター及び拠点機関名】

日本側拠点機関名	京都大学野生動物研究センター
日本側コーディネーター所属・氏名	京都大学野生動物研究センター・幸島司郎
研究交流課題名	大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全研究
相手国及び拠点機関名	マレーシア：マレーシア・サバ大学 ブラジル：国立アマゾン研究所 インド：インド科学大学

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】

ボルネオやアマゾンの熱帯雨林など、熱帯生物多様性の重要なホットスポットを有するマレーシア、ブラジル、インドの3国は、いずれも経済的・歴史的に日本と関わりが深いばかりでなく、近年の著しい経済発展と開発のため、生物多様性の保全が緊急の課題となっている点、自力での多様性保全の機運が高まっている点で共通している。熱帯生態系の多様性保全には、ゾウやトラ、オランウータン、イルカ、ワシなど、大型動物の研究と保全が重要な意味を持つ。これらの多くは、その種を守る事が他の多くの生物や環境を守る事につながるアンブレラ種であると同時に、森林伐採などに代わって地域経済に貢献可能なエコツーリズムで、その生態系のシンボルとして重要となるフラッグシップ種だからである。しかし熱帯諸国では、まだ研究者が少なく、熱帯諸国間の研究者交流も希薄である。京都大学野生動物研究センターと霊長類研究所は、これまでこれら3国でオランウータンやイルカなど多様な野生動物の行動・生態研究で大きな国際的成果をあげてきた。本計画は、これまでの交流実績をもとに、日本と相手国研究者、特に若手研究者や大学院生が対等な関係で、1) 日本が得意とする先端研究技術を駆使した大型動物の行動・生態・保全に関する共同研究、2) 野生動物の研究・教育・保全はもちろん、COP10 名古屋プロトコルの実現に向けたエコツーリズムによる地元の経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地に直結した「理想の動物園・水族館」の整備。3) 日本が仲立ちとなった熱帯諸国間の研究者交流と共同研究を推進することによって、熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを構築することを目標としている。成長著しい生物資源大国であるこれら3国と日本が対等な関係で研究交流することで、生物多様性保全に関するユニークな国際貢献を果たしたい。

【研究交流計画の概要】

本研究交流では、すでにM○Uを結んだ(締結交渉中を含む)3国の研究機関と連携して、「パターン2」(派遣国が派遣にかかる費用を負担し、受入国が受け入れにかかる滞在費等を負担する等、対等な経費費目を支出)の様態で行う。

- ① 共同研究：マレーシアでは、マレー半島最古の森であるベラム・テメンゴール森林保護区やボルネオ島の自然保護区で、野生オランウータンを初めとする多様な動物の行動・生態・保全研究をおこなう。特に、熱帯林の維持に深い関係のある種子散布者としてのアジアゾウ、マレーバク、食物連鎖の頂点にたつマレートラ、ワシなど、大変重要だがこれまで研究のほとんどおこなわれていない大型動物の野外研究を、インドやブラジルの研究者の協力も得ながら共同でおこなう。ブラジルではアマゾンカワイルカやマナティー、コビトイルカなど、アマゾン川の水生哺乳類を初めとする各種哺乳類、インドではアジアゾウや絶滅危惧イヌ科動物であるドル等に関する共同研究を行う。また、これら3国で自然生息地に直結した動物観察施設の整備に協力して、オランウータンやマナティー、アジアゾウなどの野生復帰プログラムやエコツーリズムを推進する。日本では、毎年、相手国から若手研究者を招へいして、京都大学野生動物研究センターと霊長類研究所の施設を使って、最新のゲノム科学・遺伝学・行動学・認知科学・生態学などの多様な分野での研修や共同研究をおこなう。特に霊長類学は日本から世界に向けて発信してきた学問であり、日本に学ぶニーズは高い。野生動物研究センターは幸島、屋久島、熊本などにサル、シカ、チンパンジーなどの研究施設を有しており、それらを有効活用した実習形式とする。
- ② セミナー等学術会合の開催：若手研究者教育のための研修とあわせて研究者交流と情報交換のためのセミナーを毎年1回日本で行う。また、熱帯生物多様性保全に関する国際ワークショップを日本、マレーシア(マレー半島、ボルネオ島)、ブラジル、インド4国持ち回りで行う。
- ③ 研究者交流：共同研究や研修、セミナーなどのために、4国の研究者、特に若手研究者を他国に派遣または自国に招聘し、研究者の国際交流、特にこれまで希薄だったマレーシア、ブラジル、インド間の研究者交流を日本が仲立ちとなって促進し、熱帯生物多様性保全の国際研究協力ネットワークを構築する。

[実施体制概念図]

